

## 同人作品

### 風の声 秋山義仁

人棲まぬ家の蔦の白い花朝な夕なに留まる陽光

人去りて五年ほどの空屋では家を巻く蔦屋根を抜く竹の子

ただ青し紅葉の若菜畔に沿う様々な色の階段花菖蒲

旅の終りの陽炎の舞いおどる龍飛崎さゆりの唄は風の声

影を踏む三度四度五度と影入りそして飛び立ち虚空に入る

雨が降るぬれそぼる角巻の女は君を待つ君だけを待つ

桜散り今ハナミズキひもすがら老の名残にブラックコーヒ

生き方は人さまさまにやがて死ぬたんぽぽ綿毛落ちては芽吹く

里入る闇の深さに身構える過去を背負うて灯りはひとつ  
春の午後たんぽぽ綿毛空に立つ風にまかせて明日へとんだ

リオ・ブラボー 石邊綾子

珈琲のカップの底に残された色なき記憶が誘う場所へ  
秋の実の膨らむころの澄み切った空気を想い深呼吸する  
とりあえずわれの孤独はさておきてラスボス覚悟の会議に臨む  
今ならば守りに入るひとたちの流れに棹さす真似くらいする  
まだ先が見えてはいない。くねくねと闇の真ん中LANケーブルは  
漏洩のおそれありとはなんぞやというなぞなぞに落ちてゆく身は  
嘆く間も許されずただ推定と仮説の渦にのまれてゆきぬ  
玄関に飛んで来たりし花びらを掃き集めては学び舎思う

夏を楽しく 井上省吾

暑くても朝は元気にすつと起き決めた時間に祈り捧げる  
朝ごはん何を食べるか考えて台所に立つ独り身の朝  
朝涼しよき考えが浮ぶ時思いつくまま行動をする  
実生の柿の木育ち剪定を目立たぬ花を見付けて嬉し  
実がついた山椒の木目にとまり支えを作り大きく育て  
アジサイが時期を忘れず花開き色とりどりの輝きを見せ  
窓開けた外の空気が暖かくクーラーつけてやつと一息  
考えた朝食作り変更し生玉子かけこれで済ませる  
扇風機回してちよつとひと休み余り暑くてやる気がおきず  
有難うただ一言で夜が明けるここに始まるわが人生は

今からだここから先は始めての未知の世界を生きる喜び  
目が覚めたさあ一日の始まりだ気付いた事をこの日の為に  
朝食を残さず食べてほっとする体力をつけ草刈へ行く  
朝食は肉みそ炒めドンブリへ全部食べ切り暑さ乗り切る  
草刈機担いで畑いそいと暑くなる前ひと汗かきに  
台風が雨風つれてやって来た大きな被害自然の力  
台風は海の温度も関係しその時々で通る道あり  
雨降らし風をもたらす台風が日本列島総なめにする  
スーパ一の棚に米なく品切れに他の店へ行き手に入れ出来た  
暑くても物事先へ進むには何がなんでも動くことのみ

## 外仕事

空青く木々の緑葉輝いていよいよ夏の日はやって来た

緑濃く日射しは強く夏の日の外の仕事は汗を流して

草刈機音を響かせ仕事する人の姿をよく見る季節

外へ出て木々の剪定始めると時がたつのもつい忘れがち

晴わたり出るのためらう暑い日の思い切りよく玄関を出る

外仕事一步踏み出し暑くてもやり終えた後喜び多く

外仕事ひと休みする室内で板張りの上着のみ着のまま

玄関の板張の上横たわり疲れをいやす草刈りの後

## 夏の野菜

数本の野菜の苗を植え終えて花の色にも喜びを知る

ナスの花沢山咲いて実もみのり今夜のおかずナス味噌炒め

じやがいも収穫して土落し無水鍋にてマッシュポテト

蔓延ばし花を咲かせて実もついたネットをかけて鳥除けをする

落花生種まき終えて綱を張り鳥から守り芽出し待ってる

花を見て実を見て楽し菜園に疲れはすれど喜びの勝ち

それぞれの特長を持つ野菜たち世話するにはそれなりの知恵

トマト植え実のりが多く食べ頃にトマトジュウス暑さ乗り切る

初めてのトマト色付き一つ採り床の間に置き報告をする

この時期は黄色い花が咲く野菜多く見られて目を楽しませ

甲羅干し 甲村雅俊

誰ひとり取り残さぬと誓ひます右のかひなをぐるぐるまはし

ああと鳴き飼ひ猫が吾に擦り寄れば好かれてゐるか真意わからず

蒸し暑く空気重たき午後なれど古寺に蓮の花咲きゐたり

推しはかるすべなし真昼悠々と甲羅干しする亀のころは

追憶の遙かな昔さはあれど今も眩しき夏の思ひ出

外人はいつそ招かず原爆忌われら静かに祈りを捧ぐ

### 満月

満月が南の空にのぼるころわが夢をその光で照らせ

望月の欠けたるところなきゆゑに欠点ばかりの我は憧る

御仏の大悲は明かき月のごと飽きることなく我を照らせる

### 朝鮮朝顔

ふつくらとダチュラの育つ盛夏なり種を蒔きたる覚えなけれど

毒のあるダチュラ育ちて嬉しかりシキミ枯らしてしまつた我は

さよならをみな繰返し白色の花のやうなる死者が海へと

朝鮮が原産地ではないらしく朝顔にしても花の大きく

真白なる花の不吉さベランダに朝鮮朝顔まぶしかりけり

大輪の朝鮮朝顔咲きにけり胸騒ぎする九月の朝

筑前煮 氷室敬子

青年はどこに行つたかパリの街いまも赤く燃えているか  
朝顔の青く咲きたる贈り物わが子供からの贈り物か  
とくとくと読みいるのは歌となる臍の辺りの腹の中から  
ごほごほとしぼり出すお腹の真ん中へその辺りから  
さるまたを穿かず自転車に乗ってポストにハガキ投げ込む  
夢の中いろいろあれど子を信じている大丈夫まだ生きている  
筑前煮甘い辛いはその人次第やさしく噛めば美味しくなるよ  
朝飯を早く食べれば優等生あまいぶどうのゼリーをいただく

盛夏 本田洋子

山道を行けば若葉の香して陽に透けて見ゆる緑鮮やか  
森林のフイトンチットに癒されて快い気が体を流れ  
一憂す検査結果の血糖値ニンジン嚙りて努力したのに  
久しぶり路地物の枇杷甘かりし大きな種と薄い果肉と  
誕生日おめでとうと二度言ひし老いたる吾を愛する人の  
南風白いカーテン揺らしてゐる空白の午後うつろなわたし  
自然界梅雨明けせねば蝉たちの鳴き始めぬはいと律義なり  
朝顔とアイスコーヒー扇風機サマータイムが流れるラジオ  
東天に登り出でたる満月に大暑の猛暑もさを暫し忘れて  
蝉とても暑すぎるのか真昼間は夜明け前にも蝉時雨しぐれあり  
低温にしてもシャワーが熱過ぎて真水を被る小気味良さかな

朝まだき遠き深山でホトトギス一声聞こゆいと涼しげに

保冷剤首に巻いては家事をせり溶けたらそこでコーヒータイム

氷噛みみんみん蟬を聞いている頬杖えついで何もできない

いつか見た田んぼの水辺に止まりけりお羽黒とんぼの美しさかな

ベランダに花一つだけ無かりけり共に息する草さえ途絶えて

菓子持ちて度々来たる隣人ひととなりびとに尽くして七十五歳

台風の風吹いた夕こおろぎの初鳴き聞けり八月十日

おやつにと買いて帰りましただ一つ昼寝の後のマンガゼリー

終戦子と言われて育ちいとこ従姉たち皆んな一緒の七十九歳

演奏を聴き終えて外に出いづ頭上に満月輝き居りて

孫からの暑中見舞いは一生懸命レターパックに詰め込んだお菓子

秋は未ださやかに見えねども夜明けが遅く成りにけるかな

台風の次々生まれ低気圧夏崩されていく日本列島

引退まじか 丸山光

草刈るもぎしぎし体痛みますご近所様には笑顔を向けて  
イイネ押す人は良き人好きな人知らないけれど善男善女  
目の前に婚約をした美男美女むかえ撃つのは老夫・老妻  
愛ならばボクの方が長いのだ二人の愛の馴れ初めを聞く  
タチアオイ花は下から咲き始めバベルの塔の高さを超える  
ことさらに愛を歌わぬ歌おくる選者は林あまりですから  
お金より息子の方が好きだからオレオレ詐欺にだまされるかも  
抜け殻に母のごとくに抱きついて羽根かわくまでぶら下がる蟬  
北千住わがふるさとは足立区の首都となりたり妄想なりき

後輩にいじられながら三平は苦悩の様子を飲みこみころ笑顔  
ふるさとに父母ともにおわします何かにつけて空を見上げる  
自分との意見ことなる時にだす印籠のごとき不明の笑顔  
最近の妻との齟齬をたまに来た娘に話す卑しい自分  
抜け雀志朝師匠の口跡が耳に残りて汗まで見える  
分からない自信がないと言いなながら人の話を聞かないあなた  
家族らは私の遺影で議論してわたしの意見は退けられる  
フクロウに耳ミミズクに耳はなく私の耳は話を聞かず  
角材を握った世代のわれなればライトヴァースの歌は分からぬ  
励まされ励ましてきた友がくる互いに家族に触れることなく  
嘘ばかり歌わないでね文学を理解できない妻からの苦情  
三日間霊安室は無料ですこんなチラシがきています父よ

影などを見ないで生きるつもりでもしつこいほどに寄り添ってくる

### 意識する

アイラブユーー江戸っ子ならば惚れてると言って欲しいと訂正される

アイラブユーー今日の意識は「冷蔵庫にはあなたの好きなアイスあります」

アイラブユーー今日の意識は「味噌汁に大きな浅蜷フンパツしました」

アイラブユーー今日の意識は「すぐにでもあなたのためなら何でもします」

アイラブユーー今日の意識は「足元に気をつけてねと振り返られる」

究極のアイラブユーーの意識とは「あなたの子なら産んでもいいわ」